

# 宝の海から

白浜で出会った生きものたち

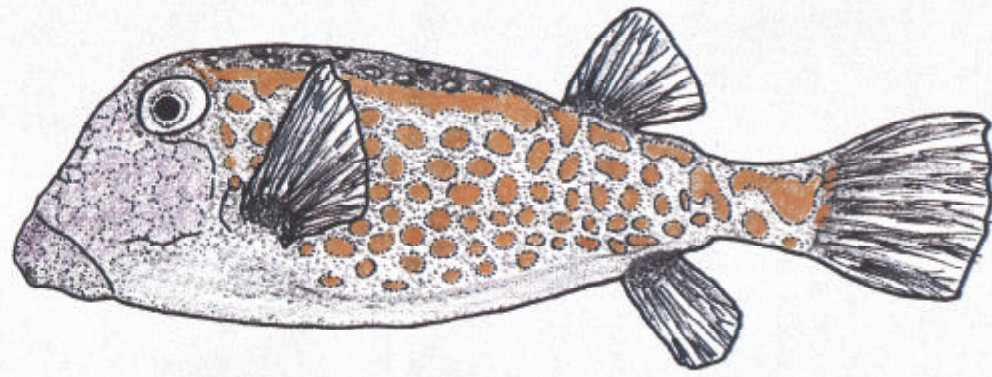
23

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

## 凍死漂着する 南方系の魚たち

冬の北浜には、普段のふりに田辺湾での生息が潜水調査や漁獲物調査で確認された。次いで04年1月28日に1個体の幼魚が北浜に打ち上げられている。

当春の白浜でも冬季の海水温はやはり冷たい。今年2月上旬にも13度近くまで急に下がった時があり、熱帯魚のツノダシが波打ち際でいれんを起し凍死寸前になっていゝのを目撃した。沖繩海域に生息する南方系フグクロハコフグもそのひとつだ。2002年に凍死した5個体の幼魚の漂着により、36年

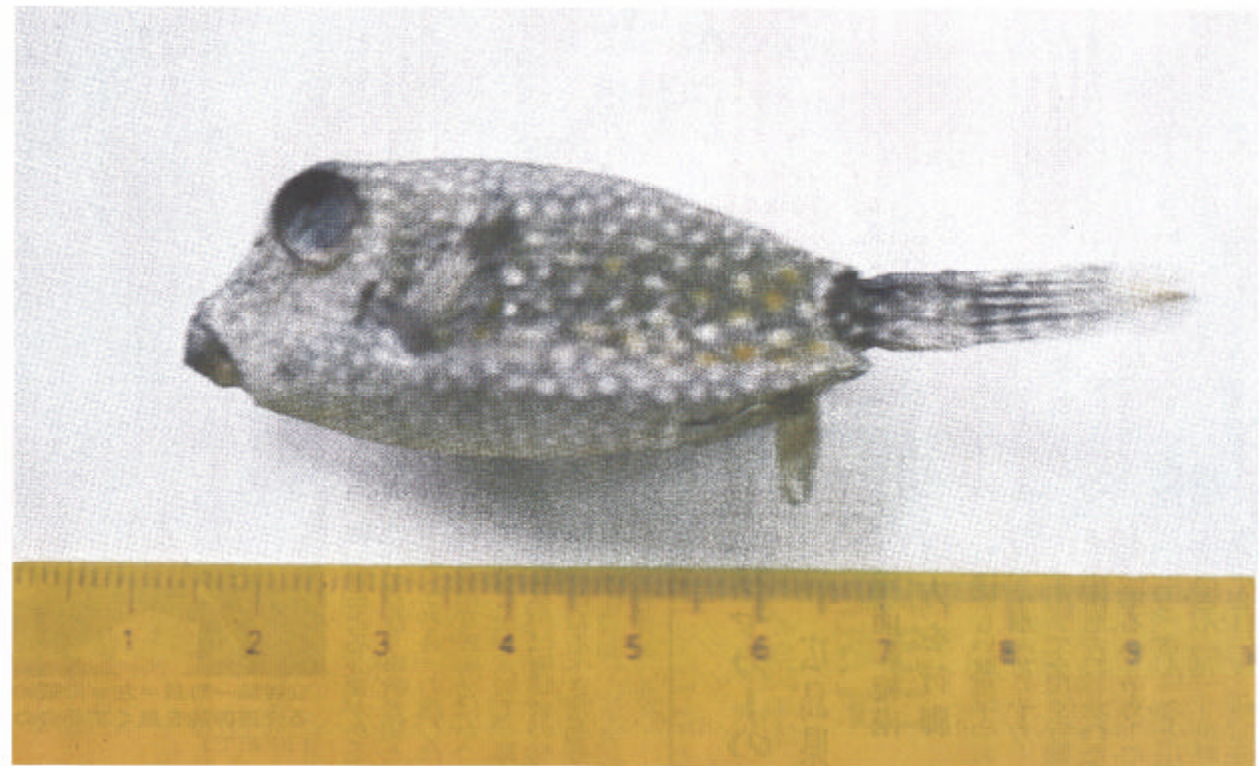


模クロ雄  
とクグの  
なるるグ  
なえフ  
に交ハ  
成様コ  
（日本産魚類大図鑑より改変）

# 変身するクロハコフグの雄

なオレンジ色の模様に変身する。いかに温暖な黒潮の影響があるとはいえ、紀南地方でクロハコフグを見ることはほとんどない。確認されてもすべてが小型の幼魚ばかりで、成長して大きくなった成熟の雄は一度も確認されたこと

水族館の水槽で泳ぐハコフグ（白浜町臨海の京都大学白浜水族館で）



凍死して北浜に打ち上げられ、36年ぶりの発見となったクロハコフグ（幼魚）

の撮影による証拠が待ちきれない。黒潮に乗って流れてきたものの、最低でも15度以上の水温でなければ越冬できない。だが、地球温暖化と近づくにつれて、黒潮の紀伊半島への接岸などは外見だけでは雌雄は分からず、今後はこの色鮮やかな雄の発見が期待される。タイパーによる生態的興味深い例がある。水草などで巣をつくるトゲウオ類は、生まれつき備わった行動から、特定の刺激に反応することから、淡水魚のオイカ

魚の形をしていなくても肉薄の物体であれば、下半分をトゲウオの雄のトレッドマークである赤色を塗るだけで、本物の雄はその物体に猛然と襲いかかって懸命に追い出そうとする。自ら作成した愛の巣を守るという縄張り行動だ。もちろん、未熟な個体はこれほど鮮やかに変身しないので繁殖には参加しないし、攻撃もしない。また、淡水魚のオイカ

だが、不思議なことに小さな水槽に数匹の成熟雄と成熟雌1匹を入れてもけんかばかり起らない。なにか目に見えないことが起っているのかもしれない。クロハコフグの成魚の雌雄の模様の差は一時的な婚姻期ではないので、繁殖期を過ぎてても変わらないはずである。この違いの意味は、あてやかな熱帯魚たちの群れる南西諸島などの海域では、同種のすてきなパートナーを一目で見定め

クロハコフグの近縁種であるハコフグが白浜近海には普通に見られる。時によつては、このハコフグが色鮮やかな水色の水玉模様をつけ、美しく身を装って、婚姻期ではないかと思われる様相を示していることがよくある。海産魚類でも雌雄にまつわるなにか興味深い行動が、とりわけ繁殖期に見られないか、調べる価値があるだろう。